

11. 短剣形石器について

本遺跡の石器を分類してある日、ふとこれまであまり見たことのない石器に気付いた。いったいこの不思議な石器は何だろう。こんな石器が今まで報告されたことがあったであろうか。破片の状態のものばかり見ているとそれが全体としてどういう形をしているのか想像がつかなかった。その理由の一つには中期のこの段階に石棒や石剣がそう多くあることは考えにくく、棒状の礫や石斧の破片であろうと思っていたからである。しかし、後期や晩期に見られるような石棒や石剣とは破片で見ると似ている面もあるが、実はそれとはまったく違う似て非なる石器であることに気づいたのである。上と下が細く真ん中が出張る細長い薄っ平らなこの変な形をした石器に出会った。それでも当時の人々はこんな石をわざわざ鮎川や鑓川の方から持ってきたのだろうとくらいにしか思っていなかった。さらに石器を覗いていくうちに1本だけでなく何本も何本も同じような形をした石が出てきたのである。これはたまたま細長い自然石をもって来たというわけではなく、1点1点をよく観察すると丁寧に加工されていることがわかったのである。敲打して形を作った上にさらに研磨して細部を整えているのである。こんな手間をかけて整形してなおかつ何十kmも離れたところから運んできた、少なくとも移動してきたのである。長野県和田峠産の黒曜石が約100kmも移動しているのはそれだけ利用価値のある石であったということであろう。黒曜石ほどでないにしても、それだけ価値のある石器であったといえよう。それを発見した時の感動は今でも心に残っている。

しかし、今まで本当にこの石器は報告されたことはなかったのだろうかということが心のどこかにひっかかっていた。そこで縄文時代中期の遺跡についてもう一度よく調べてみることにした。実測図や写真をいくつか当たっていくうちに、まったく無いものではなく、いろいろに分類されてこれまで報告されていることがわかった。

一覧表の中では石剣として分類したが、今までの他の遺跡での報告例を見ると棒状石器、打製石斧、磨製石斧、磨石類などとなっている。これを見てもわかるように実態のわからない捕らえどころのない石器であった。ここではこの特徴的な形態をもつ石器について考えてみたい。

平面形は中央に最大幅を持ち上下に向かって細くすばまっていく形態をとる。基本的にはまん中から分けたときに上下とも対称形で左右で分けたときにも対称形を意識しているものと考えられる。表と裏で見た場合にもどちらかに大きく反るということもなく、むしろまっすぐであることを意識しているものと思われる。

平均的な法量は長さ13.3cm、幅3.5cm、厚さ1.7cm、重さ147.5gであり、極端に大きいものや小さいものは少ないように思われる。まん中が幅広で上下に向かって細くなる手の中に入っても持ちやすい大きさと形になっている。

この石器の調整を見てみると、両側縁からコツコツと叩いて丁寧に形を整えている。また、表と裏は平坦であり、平坦であることをむしろ意識しているように思える。片面に自然面を残すが、自然面についてはそのまま研磨して整えている。一見するともう一方の面も自然面のように見えるが、実はよく見ると剝離面である。これも最終的には研磨して整えている。両側縁を見ると丁寧に敲打した後に研磨しているものが多い。むしろ研磨して整えることで完成をみる石器ということができないのではないかと考えられる。最終的な断面形は長方形を呈する。また、厚さは薄いことを意識しているようである。薄いものが多いだけでなく、E区 i-32グリッド1やE区 i-33グリッド1のように厚いものの中には薄く割ろうとして打撃を加えた痕跡の残るものも認められる。

また、この石器の特徴の一つが、石質は100%、すべて結晶片岩類であるということである。この石器を作ろうとしたときに最も適した石材が結晶片岩であるということが言えるのではないか。なおかつ、本遺跡では結晶片岩の中でも緑色系の石材は非常に

少なく、白色系の雲母と石英を多く含むものが多いという特徴があった。

本遺跡ではこの石器はグリッド出土のものが多く、出土位置も遺跡の全体から検出されており、どこからが多くてどこからは出ないということは言えない。反対に言うところからでも出てくるこの時期に特徴的な石器ではないとも言えるのではないか。本遺跡の場合、全体の中でも数量的に多く、石匙などよりも一般的な石器であり、もしかしたら中期に特徴的な石器ではないかと考えた。そこで次に縄文時代中期の他の遺跡との比較を次に行ってみたい。

高崎市大平台遺跡 10本以上出土しているようである。打製石斧として報告されている。写真のみの掲載であるが、中央が幅広で上下が細くなり、結晶片岩製であるので間違いなく同じ仲間の石器であることがわかる。

北橋村房谷戸遺跡 縄文時代中期中葉の遺跡であり、伴出する土器からすると全体的には本遺跡より若干古い傾向がある。欠損品を含め5本の写真の掲載があり、1本の実測図が掲載されている。側面を見ると敲打→研磨の工程を取っており、この石器の特徴が明示されている。報告書の中では磨石類として扱われている。石質は黒色片岩である。

北橋村道訓前遺跡 本遺跡と時期的にも規模的にもほとんど同じであり、遺跡全体では欠損品を含め、20～30本程出土しているようである。現在整理中であり、詳細については今後報告書が刊行されてから改めて検討が必要と思われる。石質はすべて結晶片岩である。

赤城村三原田遺跡 縄文時代中期中葉から後半が主体となる遺跡であるが、どちらかという後半が中心となる。2本の実測図と写真が掲載されているが、磨製石斧として報告されている。石質は2本とも緑色片岩である。

渋川市行幸田山遺跡 縄文時代中期中葉から後半が主体となる遺跡であるが、どちらかという後半が中心となる。5本の報告例がある。棒状石器として報告されている。石質は5本の内3本が黒色片岩

であり、そのうち1本は雲母黒色片岩である。他の2本は緑色片岩である。

伊勢崎市下海老遺跡 縄文時代中期中葉もあるが、後半が主体となる遺跡である。1本の実測図が掲載されている。棒状石器として報告されている。石質は結晶片岩とあるが、写真等からすると雲母を含む材質のようである。

埼玉県台耕地(I)遺跡 縄文時代中期中葉から後半が主体となる遺跡であるが、どちらかという後半が中心となる。破片も含めると数本以上の出土があると思われるが、実測図から判断すると確実なものは2本のみである。石質は結晶片岩であるが、雲母を含み、白っぽい感じがする。

群馬町上野国分僧寺・尼寺中間地域 縄文時代中期後半が主体となる遺跡である。実測図等からするとその可能性のあるものは欠損品が1本ある。実測図等からすると結晶片岩と考えられる。

前橋市・吉岡町清里・長久保遺跡 縄文時代中期中葉もあるが、後半が主体となる遺跡である。実測図や写真から判断すると12本以上の出土があったようであるが、欠損品が多く全体の形がわかるものは少ない。報告書の中では棒状石器や打製石斧として扱われている。石質は黒色片岩や雲母石英片岩が多い。

次にこの石器に関する問題点についてもう一度整理して考えてみたいと思う。一つにはこの石器が所属する時期は本当はいつなのかということである。本遺跡は古いところでは縄文時代早期前半(燃糸文土器)の段階から平安時代終わりの11世紀代までの複合遺跡であり、その中のいったいつの時期に作られ、現在に残されたものなのか。平安時代であっても住居跡の中から似たような棒状の礫は出てくるし、そうしたものには若干の敲打痕や磨面が残っているものもある。本遺跡でも平安時代の住居の中からも出ていたので悩んだが、まず一番土器や遺構量の多い中期から調べてみることにした。その結果、他の時期の似たような石器はどうもよく観察すると微妙なところが違っている。結晶片岩で両側縁に敲

III まとめと考察

打痕のある他の時期の石器は、平面形を見るとそこが窪んでいたり、両側縁が非対称形であったり、凸凹になっていたり、整っていないものが多い。真ん中が出っ張るように形が整えられ、しかも研磨されているものは縄文時代中期のものしか見あたらない。本遺跡の場合、スクレイパー類、打製石斧、敲・磨・凹石類に次いで多いものであり、破片を含め84本が出土した。今のところ前期の遺跡でも単なる棒状の礫はあるもののこの石器は見たことはない。打製石斧は前期でも多く一般的に認められるものであり、それがあったからといって前期か中期かという判定はできない。しかし、この石器が縄文時代中期を特徴付けるものだとすれば、反対に言うところの石器があれば縄文時代中期のものがあるということも言えるかもしれない。この石器の所属時期が明らかにされたということが本遺跡の成果の一つと言えると思う。

さて、この石器の所属時期が明らかにされたところで最大の問題点はこの石器はいったい何に使われたのであろうか、ということである。いろいろな人が様々なことを言っているが、縄文時代の石器の中でこれはこういうふうに使われたということがはっきりわかっているものは実は非常に少ない。石器の機能・用途を考える場合難しいことは、一つは同じような形をしているからと言って必ずしも同じ機能・用途に使われたとは言えないということである。しかし、同じ大きさで同じ形、同じような重さをしていけば同じような機能・用途を持っていたと考えてもいいのではないかとということである。

そこで、いくつかの仮説を立てそのことについて考えてみたい。一つ目はこも編み石ではないかという仮説についてはどうか。真ん中が出っ張っていても紐を8の字に掛ければこも編み石として使うことも可能である。しかし、当時の人々がそんなふうにするだろうかという疑問が湧く。ただ単に紐を掛ければいいのであれば両側を敲いて打ち欠くか、窪ませればいいことである。わざわざ真ん中に出っ張らせるような形にすることはない。しかも磨いて紐を滑り易くする必要もないであろう。この考え方には

疑問は残る。

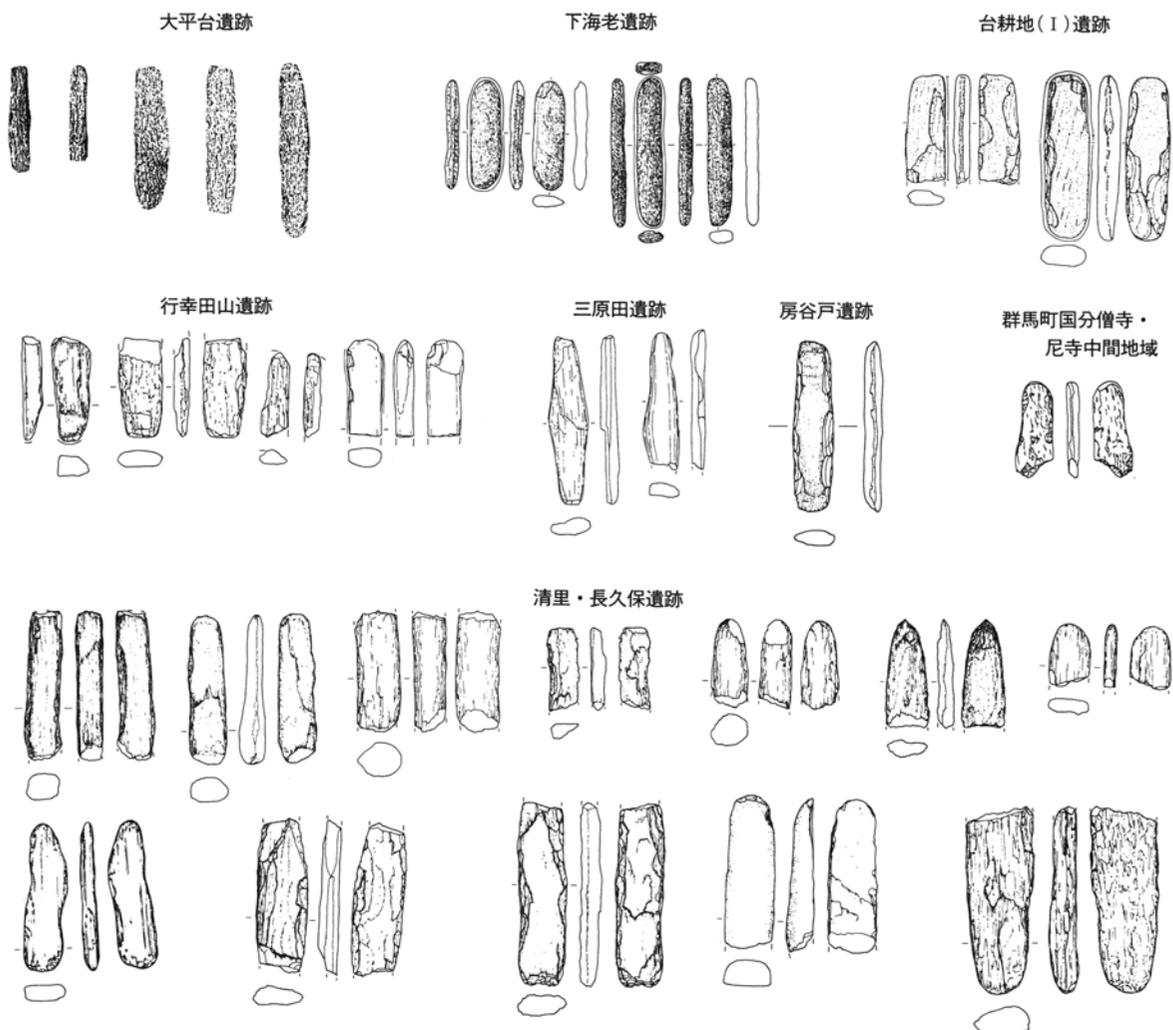
次に、縄文土器の混和材ではないかという仮説についてはどうか。確かに本遺跡の土器の胎土をよく観察すると結晶片岩や同岩中に脈状にできる石英などを潰して混ぜ込んでいるものも多いのも事実である。しかし、それならばわざわざ真ん中を出っ張らせ上下両端を細くするような形に整える必要はないのではないか。それともこの形にしてやらないと流通しなかったということであろうか。それならば尚更、この形にこそ意味があるのではなかろうか。やはりこの考え方にも疑問が残る。

最後に、真ん中に最大幅がきて上下両端が細くなっているのはソケットに装着したときに、真ん中でひかかって止まるようにしてあるからとは考えられないだろうかという仮説である。直柄もしくは曲柄に着柄するような使用方法を考えたときに真っ先に思い付くのは打製石斧と同様な使い方をしたのではないかということである。ソケットに着柄することを考えれば両側縁がよく敲打され、研磨されているのも納得できる。それ以外の途中に無用の出っ張りがあったりしてはひっかかってしまってよく着柄できない。研磨してあればすりと入るし、磨いてあるといつてもつるつるになっているわけではないので、抜けにくい。また、外に出ている部分が細くなっていることによって深い穴を掘ったりするには打製石斧よりも有効かもしれない。先が幅広になっている打製石斧は広く浅く掘ったり、削ったりするには有効でも穴を掘るにはあまり適していない。台湾のヤミ族の例（奥田・岡田・野村1941、鹿野1946、野村1969）や諏訪清陵高校の実験結果（藤森1970）が示すように、むしろ掘り棒の方が有効であると考えられる。現在我々が使っている赤白のポールの先にも鉄器が付いたものがあるし、民俗例でも掘り棒の先に鉄器が付いたものを使っている地域もある。それが付いていることにより重みを増し、丈夫になり、より突き刺し易くなっているのである。これでも若干の疑問が残らなくはない。なぜ、薄いものが多いのかということである。単純に考えれば薄いも

11. 短剣形石器について

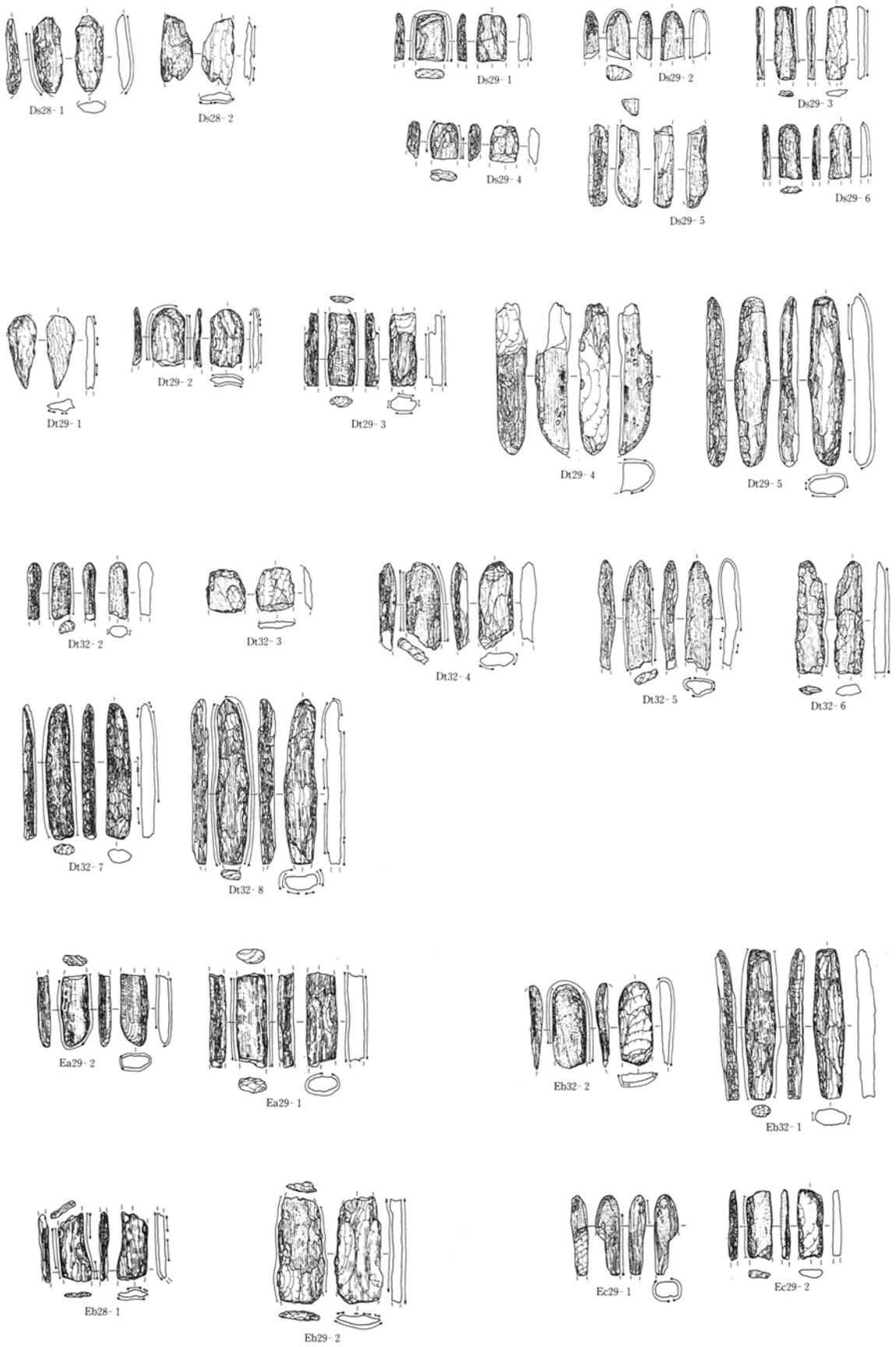
のよりも厚いものの方が丈夫ではないかと思う。しかし、打製石斧を考えてみると、かなり分厚いものもあるが、そんなに厚いものよりは薄いものが多い。さらに完形品で遺跡に残されているものを見ると以外に薄いものが多いことがわかる。厚いものは胴部中央から割れているものも多くある。結晶片岩の場合には石の目が縦にすっきりと通っており、あまり分厚い必要がなかったのではないかということである。薄いものの方が深く突き刺すのには適している。かえって結晶片岩でも厚いものは調整するため側縁から敲く回数が多くなるので割れやすく、壊れやすいものになってしまうのではないかと考えられる。

結晶片岩の中でも緑色系のものが少なく、雲母や石英を多く含む白色系のものが好まれるというのは、作ってみればわかることだが、前者は脆く壊れやすく、後者は前者に比べて硬く壊れにくいということに他ならないのではないかと考えられる。結晶片岩という石質のため使用痕についてはそれを実証できるまでの観察ができにくいのが残念である。もしかしたら、表裏が研磨されているだけでなく、その上を使用痕が覆っているかもしれないが、こう考えるとすべてについてそれなりの理由が付く。現在のところ、一つ目の仮説や二つ目の仮説に比べるとこの三番目の仮説が一番可能性が高いのではないかと考えられる。



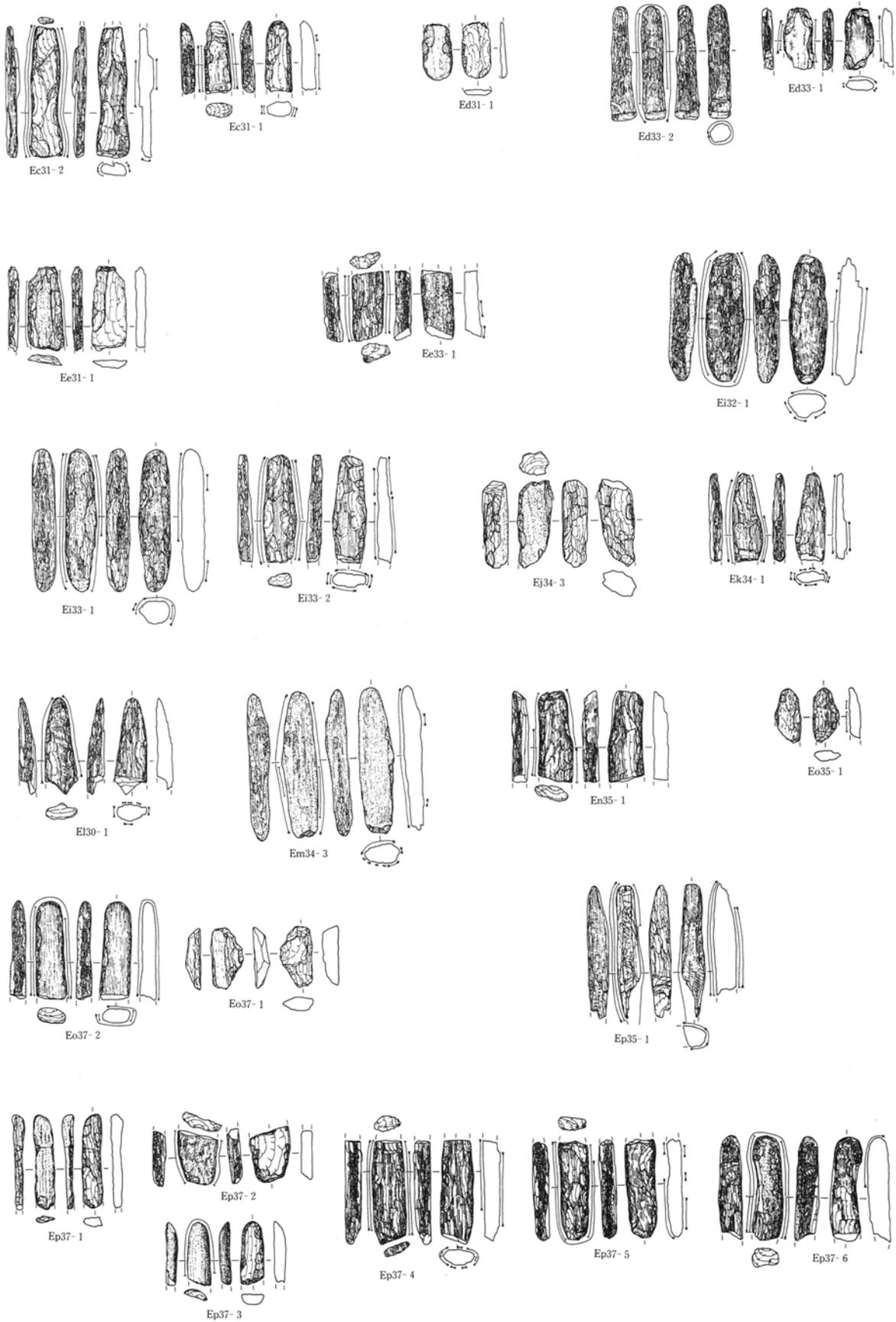
第465図 縄文中期短剣形石器出土例

III まとめと考察



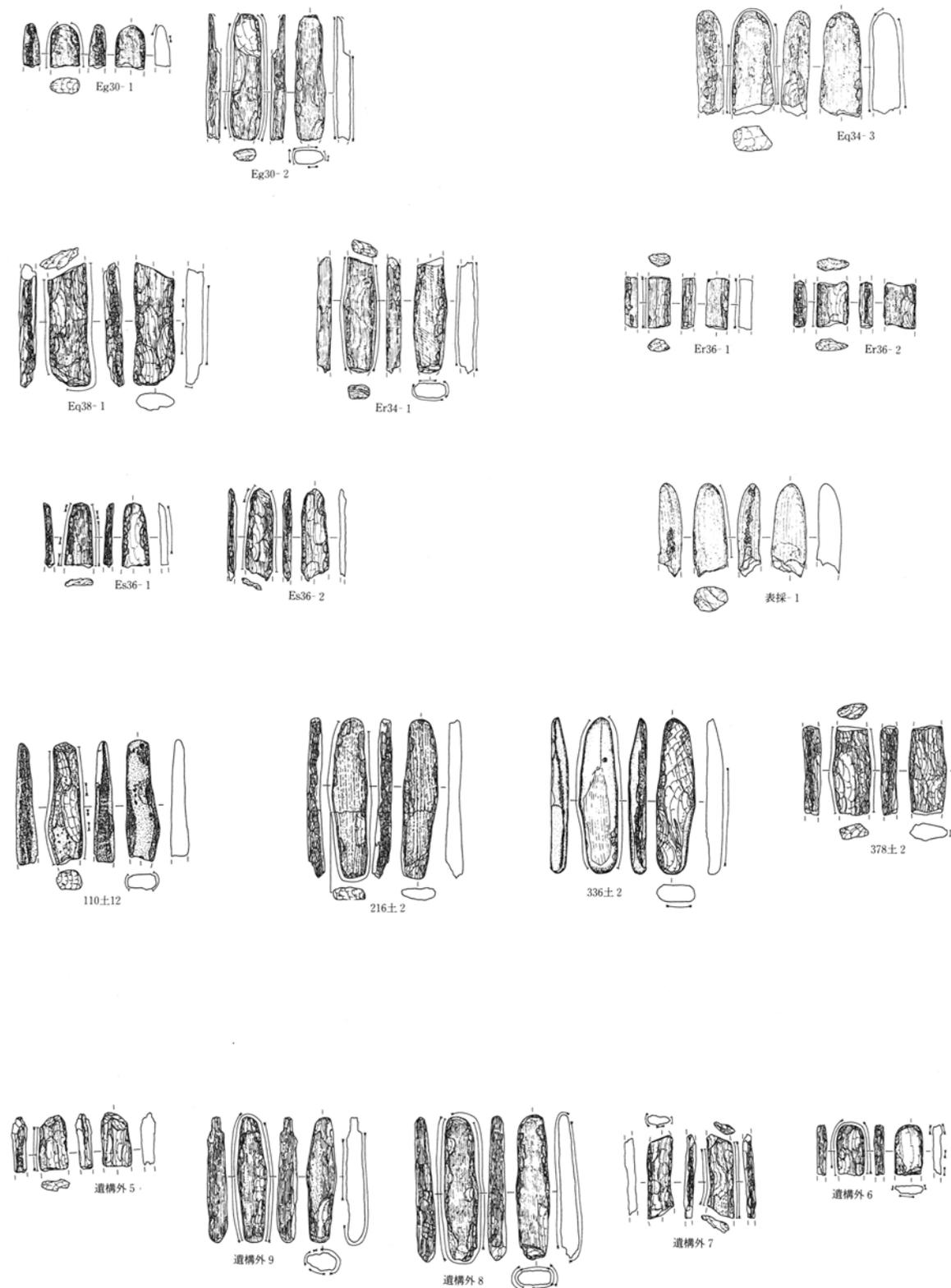
第466図 沼南遺跡出土短剣形石器等集成図(1)

11. 短剣形石器について



第467図 沼南遺跡出土短剣形石器等集成図(2)

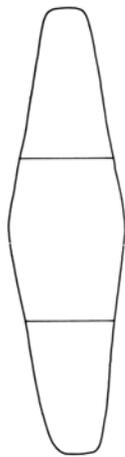
III まとめと考察



第468図 沼南遺跡出土短剣形石器等集成図(3)

11. 短剣形石器について

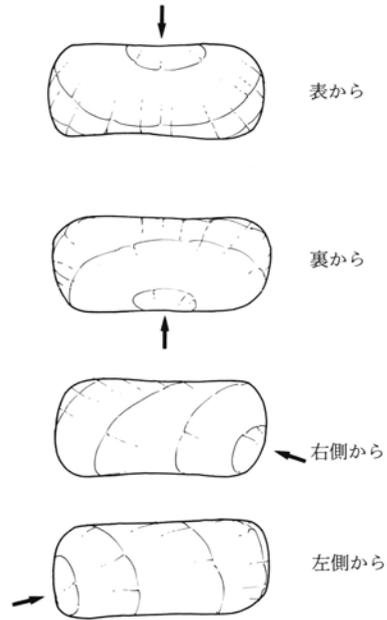
残存部位



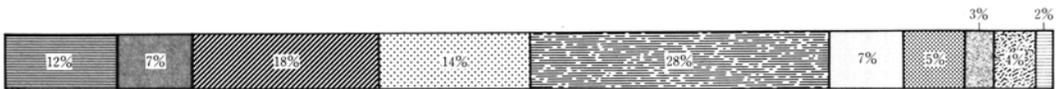
- 1 (頭部のみ残存)
- 1・2 (頭部～胴部残存)
- 2 (胴部のみ残存)
- 2・3 (胴部～刃部残存)
- 3 (刃部のみ残存)

欠損面

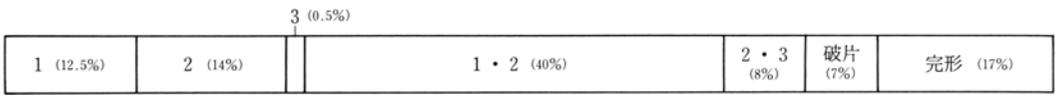
←力が伝わった方向



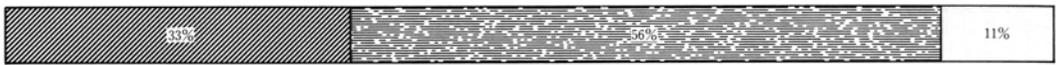
短剣形石器



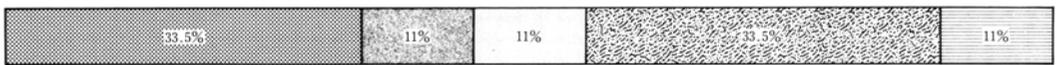
残存



1



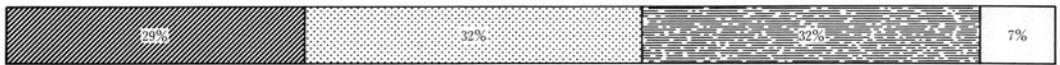
2



3



1・2



2・3



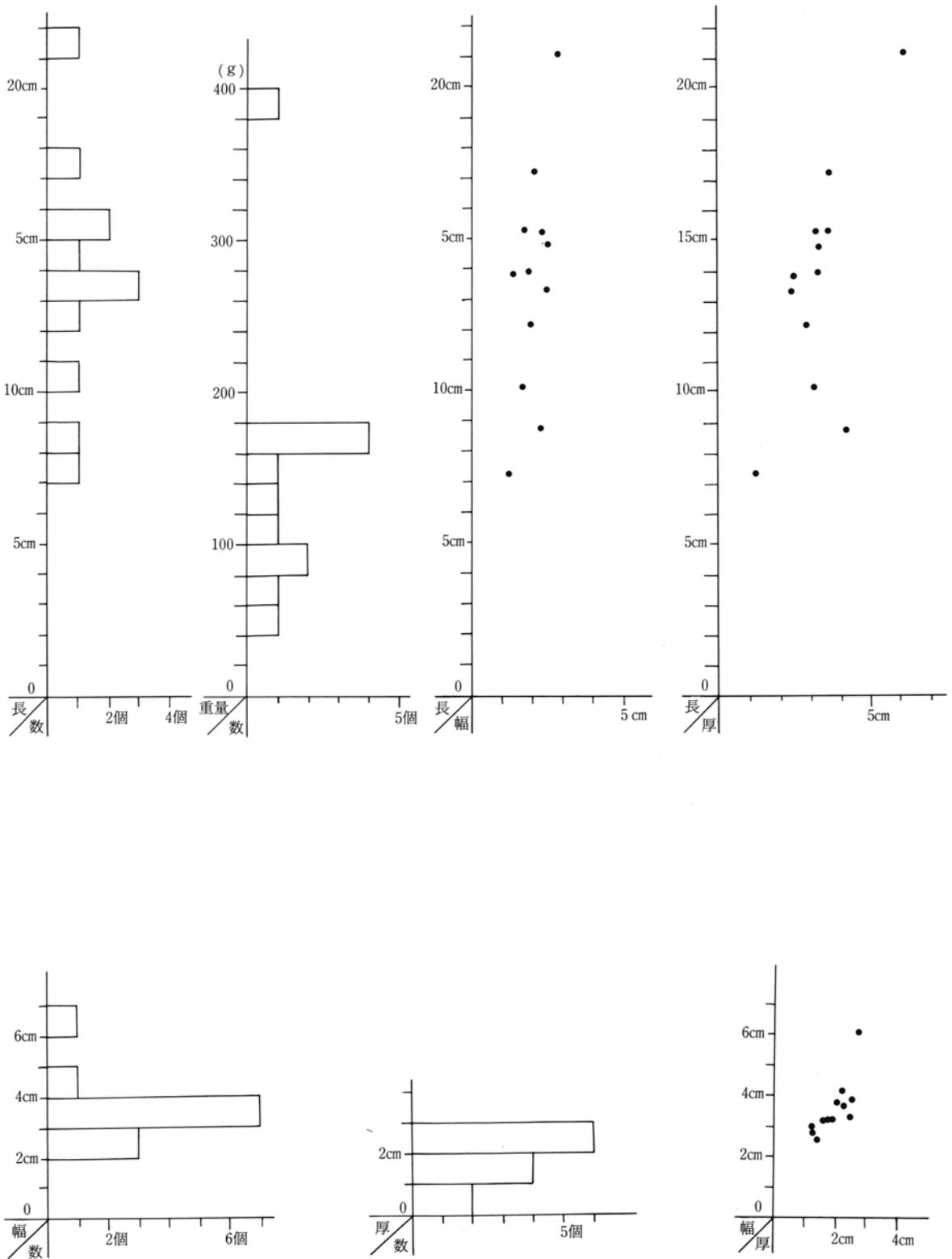
破片



- 完形
- 側表
- 表
- 側裏
- 側
- 破片
- 側側
- 裏
- 裏裏
- 表裏

第469図 短剣形石器数量・相関図

III まとめと考察



第470図 短剣形石器欠損部位方向百分率